

『本草綱目』の受容とイシガメ観の変遷 ～17世紀の本草書を中心に～

後藤康人 (えどがわ生物懇話会)

Acceptance of "Compendium of Materia Medica" and transition of the outlook on Japanese pond turtle

～ Focusing on the Herbalism books of the 17th century ～

By Yasuhito GOTO

イシガメという言葉は古く、遡れば平安時代の『本草和名』(深根輔仁, 延喜年間 901 - 923 年) や『倭名類聚抄』(源順, 承平年間 931-938 年) で確認することができる。この時代の人びとのカメ観は、海にはウミカメ(宇美加米)が、川にはカワカメ(加波加米, スッポン)が、そして山などの内陸にはイシカメ(以之加女・伊之加米)がいる、といったものだったようだ。これら緩やかな3分類に見直しを迫る契機となったものが、徳川幕府成立とほぼ同じ時期、17世紀初頭に舶来した、『本草綱目』(李時珍, 1596年に南京で刊行)である。およそ260年にわたる長期安定政権となった徳川幕府施政の下で日本の本草学は最盛期を迎える。17世紀はそれらの研究が発展期に入ろうとする時代だった。

本報告では、本草書を中心に17世紀に出版された書物を概覧し、『日葡辞書』(イエズス会, 1603-1604), 『多識編』(林羅山, 1612), 『東医宝鑑』(許浚, 1613), 『庖厨備用倭名本草』(向井元升, 1671), 『本草弁疑』(遠藤元理, 1681), 『本朝食鑑』(人見必大, 1697), 『広益本草大成』(岡本一抱, 1698)から、カメに関する記述を集成した(表1)。大陸国家であり淡水棲だけでも多数の種が生息する中国のカメ観(『本草綱目』の亀鼈類は17種)は、海洋国家であり淡水棲カメの種数に乏しい日本の本草学者たちにとって新たな知見をもたらすものだった。しかし、それは新たに混乱を与えるものでもあったことが窺えた。

表1. 亀・水亀・秦亀の記述の有無と訓

文献名	成立年 (和暦)	著者 (生没年)	記述の有無および訓			その他・備考
			「亀」	「水亀」	「秦亀」	
本草和名	901-923 (延喜年間)	深根 輔仁 (平安時代中期)	○(亀甲) 宇美加女/ウミカメ	—	○ 以之加女/イシカメ	
倭名類聚抄(和名抄)	931-938 (承平年間)	源 順 (911-983)	○ 宇美加米/ウミカメ	—	○ 伊之加米/イシカメ	
本草綱目	1596	李 時珍 (1518- 1593)	○	○	○	
日葡辞書	1603-1604 (慶長8-9年)	イエズス会	○ Came/カメ	—	—	Came(カメ), Cózzu(コオズ) Dógame(ドオガメ), Ixigame(イシガメ)
多識編	1612 (慶長17年)	林 羅山 (1583-1657)	—	○ 美豆加米/ミズガメ	○ 也未加米/ヤマカメ	
東医宝鑑	1613	許 浚 (1539-1615)	○(亀甲) 남생이	—	—	日本に舶来したのは1662年(寛文2年) 남생이(ナムセンギ)はクサガメ
庖厨備用倭名本草	1671 (寛文11年)	向井 元升 (1609-1677)	○ 「カメト云フハ綜名ナリ」	○ スイキ/イシガメ	○ シンキ/ヤマカメ	秦亀→「此ノカメハ山中ニアリテ水ニ入ラザルガ 故ニイシガメト云ヒ ヤマカメト云フ」
本草弁疑	1681 (天和元年)	遠藤 元理 (生没年不詳)	○ 亀/キ	—	—	「和ノイシカメハ板甲共ニ薄ク色黒ク 唐ノ者ニ不似」
本朝食鑑	1697 (元禄10年)	人見 必大 (1642頃~1701)	—	○ 宇美加米/ウミカメ	○ 伊志加米/イシカメ	「石亀者山亀也」(石亀ハ山亀ナリ)
広益本草大成	1698 (元禄11年)	岡本 一抱 (1685-1733)	○ 亀/カメ	—	○ シンキ	「イシガメハ本綱説ニ不合 惟唐ヨリ来者ヲ用テ佳シ」 秦亀→「在山中亀大而可占ト者也」